**「逆境を詠う」　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山居　閑人**

　「人生　なく としての塵の如し」、の「雑詩其の一」の冒頭の句です。また、も「人生 至る処 知んぬ 何にか似たるを　に似るべし のを踏むに」と詠っています。このように、人生にははつきものであり、多くの詩人の内、ある者は政争に敗れ、ある者は皇帝などの怒りに触れて流罪となり、逆境の生活を送っています。

　このような逆境にあるときに作られた詩歌には、特に優れたものが含まれています。このたびは「逆境を詠う」と題しまして、これらの詩歌、及び、それを作った時の作者の心情を紹介したいと思います。

　最初に、の**「を渡る」**を紹介いたします。杜審言は、杜甫の祖父にあたり、の時代に宮廷詩人として活躍しましたが、傲慢な振る舞いが多く、則天武后の死と共に失脚し、ベトナム地方に流されました。この詩には、かつての華やかな時代と、流刑地に向かう現在の身分とが見事に表現され、作者の悲しみを表しております。

**遲日園林悲昔遊　　　 を悲しむ**

**今春花鳥作邊愁　　　 花鳥 をす**

**獨憐京國人南竄　　　り憐れむ の人 せられ**

**不似湘江水北流　　　似ず の水のするに**

続きまして、として名高いの**「にてを送る其の一」**を紹介いたします．王昌齢は、素行が悪かったため、このとき南京に流されておりました。京に帰る友人に対して「左遷などにくよくよせず、玉でできた壷の中の氷のような澄み切った心でいる」といいながら、「」「なり」の語が良く効いて、寂しい本心を表している絶唱です。

**寒雨連江夜入呉　　　 にって 夜 に入る**

**平明送客楚山孤　　　 を送れば なり**

**洛陽親友如相問　　　洛陽の し問わば**

**一片冰心在玉壺　　　一片の に在り**

続きまして､「其の二」を紹介たします。この詩においては、強がりはみられず、取り残される寂しさが率直に表現されています。

丹陽城南秋海陰　　　 **く**

丹陽城北楚雲深　　　 **深し**

高樓送客不能醉　　　**高楼 客を送りて 酔うわず**

寂寂寒江明月心　　　**たる 明月の心**

日本において、流罪となった人物の中で一番有名なのはです。道真は、宇多天皇の引き立てにより、藤原一族以外と家門としては、異常とも言える出世をし、右大臣にまで昇りましたが、これを喜ばない藤原氏の讒言により、太宰府に流されました。太宰府の長官でしたが、政務には関与するべからずとされ、事実は流刑でした。無実の罪によることは明らかでしたが、儒者である道真は勅命に対して不満を漏らすことはできず、賢んで受け入れる以外にありませんでした。僅かに、を頼りとし、和歌を送って助けを求めました。この和歌を紹介致します。

**流れゆくわれはみくづとなりはてぬ君しがらみになりてとどめよ**

道真の和歌を見た宇多上皇は、早速、に面会を求めて参内しましたが、藤原氏に力尽くで止められて面会することはできませんでした。このようにして、道真はに送られることになり、家を離れる際に、梅の木を見て和歌を詠みました。この有名な和歌を紹介致します。　この和歌を聞いた梅の木が、後ほど、道真のいる太宰府へ、一夜のうちに飛んでいったという「飛び梅」伝説を生みました。

**東風吹かばにほひおこせよ梅の花 あるじなしとて春な忘れそ**

に向かう途中、明石の宿場に宿ったとき、驚いている宿場の長に、詩を作って与えました。｢花は咲いても秋には枯れる｣と悟った気持を詠った物です。「」は成語となっております。一方、道真は、前途への不安を和歌に詠みました。これらから、道真の気持ちは複雑であったことが推察されます。これらの詩と和歌を紹介致します。

駅長莫驚時變改　　　**駅長 驚くれ、時のするを**

一榮一落是春秋　　　**は是れ**

**つ星道も宿りもありながら空にうきても思ほゆるかな**

旅の途中、道真は、今たどってきた道を振り返り、和歌を妻に送りました。に採録されているこの和歌を紹介いたします。

**君がすむ宿のこずゑのゆくゆくと隠るるまでにかへりみしやは**

太宰府に着いてから間もなく、道真は**「」**という詩を作りました。この詩を紹介致します。あまりの境遇の変化に悲しみに暮れ､京の空を見やっても、何の慰めにもなりませんでした。

**離家三四月　　　家を離れて**

**涙落百千行　　　落つる涙は**

**万事皆如夢　　　万事 皆夢の如し**

**時時仰彼蒼　　　のを仰ぐ**

　では、道真は身柄を拘束されるようなことはありませんでしたが、勅命を賢んで謹慎生活を送りました。その心境を**「門を出でず」**という詩に表しております。ひたすら謹慎した心境で有り、敢えて外出することもないことを述べております。この詩を紹介致します。

**一従謫落在柴荊　　　せられて にきしより**

**万死兢兢跼蹐情　　　たり の**

**都府桜纔看瓦色　　　はかに を**

**観音寺只聴鐘声　　　は を聴く**

**中懐好逐孤雲去　　　好しをいて去り**

**外物相逢満月迎　　　外物はいて 満月こう**

**此地雖身無検繋　　　の地 無しとも**

**何為寸歩出門行　　　れぞ も門をでて行かん**

太宰府に於いて、北から飛んできた雁を見るに付けても、道真には、自分と対比して雁がうらやましく見えました。そして、このことを**「を聞く」**という詩に詠いました。この詩を紹介致します。雁は来春になれば帰って行くが､自分は何時京に帰れるか分からないことへの悲しみが見事に表現されています。

**我爲遷客汝來賓　　　我はり は**

**共是蕭蕭旅漂身　　　共にれとして の身**

**欹枕思量歸去日　　　枕をてす の日**

**我知何歳汝明春　　　我はんぬれの歳ぞ は**

また、道真がこの時読んだと思われる和歌がに採録されております。この和歌を紹介致します。

**雁がねの秋なくことはことわりぞ かへる春さへ何かかなしき**

流罪となってから、一年近くが経過し、あの「秋思の詩」を作った九月十日がやってきました。道真は、その時のことを思い出し、褒美として賜った衣を毎日捧げ持って、炊き込められた香の香りを味わい、宇多上皇の恩を偲ぶことを詠いました。この詩**「九月十日」**を紹介致します。

**去年今夜待清涼　　　去年の今夜 に待す**

**秋思詩篇獨斷腸　　　の り**

**恩賜御衣今在此　　　の こにり**

**捧持毎日拜餘香　　　して　毎日を拝す**

**道真は、又、曾て宇多天皇の寵愛に預かっていたころを懐かしむ和歌を作っております。新古今集に採録されたこの和歌を紹介致します。**

**道の辺の朽ち木の柳春くればあはれ昔と偲ばれぞする**

　「九月十日」を作った月の十五夜の日、道真は月を見ながら「」という詩を作りました。「の」と並ぶ有名な詩です。迫り来る老いの中で、自分の無実の罪を晴らすことが出来ない無念さと悲しさを見事に表した詩です。**「秋夜」**を紹介致します。

黄萎顔色白霜頭　　　**の の**

況復千餘里外投　　　**や にぜられしをや**

昔被栄花簪組縛　　　**昔は にせられ**

今為貶謫草莱囚　　　**今は のとなる**

月光似鏡無明罪　　　**月光は鏡に似るも 罪を明らかにすること無なく**

風気如刀不破愁　　　**は刀の如くしてを破らず**

随見随聞皆惨慄　　　**見るに随がい聞くに随がい**

此秋独作獨身秋　　　**此の秋 り我が身の秋とる**

また、道真は、このころの嘆きを和歌に詠んだことが『大鏡』に記載されております。野山に立つ煙が、自分の嘆きという「木」を焚き添えることで更に燃えまさると詠ってます。また、新古今集には、自分が無実であることを月だけが知っていてくれるとした和歌が新古今集に採録されております。これらの和歌を紹介致します。

**夕されば野にも山にも立つけぶり歎きよりこそ燃えまさりけれ**

**海ならずたたへる水の底までにきよき心は月ぞてらさむ**

道真は、秋の月を擬人化し、月に対して問う詩と、月に代わって問に答える詩を作りました。最初に**「に問う」**を紹介します。これは、形を変えるがその本質を失わないのに、雲に蔽われて西に流されていく月と自分の姿を対比したものです。

**度春度夏只今秋　　　春をり夏をり は秋なり**

**如鏡如環本是鉤　　　鏡の如くの如く はれ なり**

**為問未曾失終始　　　為に問う てを失わざるに**

**被浮雲掩向西流　　　にわれて 西に向かいて流るるかと**

つづいて**「月に代わりて答う」**を紹介致します。月は言います。「天はやがて私をっている雲を払いのけてくれるであろう、私は、ただ、西に向かって流れるように見えるだけで、左遷された訳では無いのだ。」と。天の月と人間世界にある道真とは、運命が違っていたのです。

**蓂発桂香半且圓　　　はき は香り ならんとす**

**三千世界一周天　　　 天を一周す**

**天廻玄鑑雲将霽　　　天はをして　雲 にんとす**

**唯是西行不左遷　　　 れ西に行くのみb左遷にあらず**

　これらの詩に対応すると思われる和歌が、新古今集に採録されております。この和歌を紹介致します。

**月ごとにながると思ひしますかがみ西の海にもとまらざりけり**

に流されてから二年が経過し、道真は自分をやのの故事にならぞえ、京へ帰りたいと言う思いを込めた「の」という詩を作りました。この詩が道真の最後の作と考えられます。京に帰りたいという願いも空しく、道真は９０３年２月２５日に、５９歳の生涯を閉じました。**「謫居の春雪」**を紹介致します。

**盈城溢郭幾梅花　　　城にちにるは のぞ**

**猶是風光早歳華　　　 れ のなり**

**雁足黏将疑繋帛　　　の足にしては をたるかと疑い**

**烏頭點著思帰家　　　烏のにつきては 家に帰らんとう**

再び、中国に話を戻しましょう。政争に敗れて流罪となった詩人の多くは、時代の変遷と共に、中央に復帰する機会に恵まれました。しかし、は、最後まで地方周りで終わった悲劇の詩人でした。政争に敗れたとき、の長官であるとして左遷されましたが、赴任の途中で長官の補佐役であるのに格下げされました。左遷された司馬には、実際の仕事は与えられません。

　そのような境遇の中で作られたのが希代の名作**「」**です。白一色の鎖された牢獄のような世界、動く物と言えば降りしきる雪だけ、その中で釣り糸を垂れる孤独な。この翁の姿には、このときの柳宗元の心象が見事に投影されています。

**千山鳥飛絶　　　 鳥飛びえ**

**万逕人蹤滅　　　 す**

**孤舟蓑笠翁　　　 の**

**独釣寒江雪**　　　**り釣る の雪に**

柳宗元は、その後の刺史として地方に左遷され、**「二月 落ち尽くして偶々題す」**という詩を作りましたこの詩には、政争に敗れて流罪となった悲しみが、何に付けても深まることが表されております。

宦情羈思共悽悽　　　 **共に**

春半如鞦意轉迷　　　**春 ばなるに秋の如く た迷う**

山城過雨百花盡　　　**の 尽き**

榕葉滿庭鶯亂啼　　　 **庭に満ちて鶯 乱れく**

中央への復帰の希望が無くなるにつれ、柳宗元の気持ちは、望郷の念へと移ってキムした。「の早春」は、そんな気持を表した詩です。その願いも叶わず、柳宗元は、柳州の地で最後を遂げました。**「の早春」**を紹介致します。

**問春從此去　　　春に問うこり去りて**

**幾日到秦原　　　幾日かに到ると**

**憑寄還鄉夢　　　り寄す　 にるの夢**

**慇勤入故園　　　ににれ**

も、「」や「」で政治を批判したことがし、ふとしたにより司馬としてに流罪となりました。慌ただしい旅立ちと、京を離れる苦痛から遅々として進まぬ足取りを**「初めて官をされを過ぐ」**と言う詩に詠っております。望秦嶺は、長安の南方にあるにある山で、長安を一望できる最後の山です。この詩を紹介いたします。

**草草辭家憂後事　　　として家を辞してをい**

**遲遲去國問前途　　　として国を去りて前途を問う**

**望秦嶺上迴頭立　　　 をらせて立てば**

**無限秋風吹白鬚　　　無限のを吹く**

白居易が江州に向かう途中で作られた**「」**を紹介たします。白居易の挫折感が表れています。

**人生四十未全衰　　　人生四十 未だ全くは衰えず**

**我為愁多白髪垂　　　我は愁い多きが為に 白髪る**

**何故水辺双白鷺　　　の 何故に愁い無きも**

**無愁頭上亦垂糸　　　頭上にた糸をる**

に付いた白居易は新たにを建てて、そこで過ごしました。左遷されてきた司馬には実際の仕事は与えられませんでした。江州の地は、てが隠棲した地に近く、白居易は、そこで、清少納言の故事で有名な詩**「 新たにをし草堂　初めてたまにす」**を作り、これは自分にふさわしい地で、この地で一生を終えても良いという意を示しました。

　しかし、この詩に表された白居易の心が強がりであったことは、後に作られた詩から明らかになっています。

**日高睡足猶慵起　　　日 高く　睡り足りて お 起くるにし**

**小閣重衾不怕寒　　　にを重ねて 寒をれず**

**遺愛寺鐘欹枕聽　　　の鐘は 枕を （てて聽き**

**香爐峯雪撥簾看　　　の雪は を ねて看る**

**匡廬便是逃名地　　　は ちれ 名を逃るるの地**

**司馬仍爲送老官　　　はお 老いを送るの官り**

**心泰身寧是歸處　　　心 く 身 きは れ する**

**故鄕何獨在長安　　　故鄕 何ぞり 長安にのみ 在らんや**

　同じく流罪となり、を越えた詩人に硬骨漢として知られるがいます。時の皇帝はで、病弱であった為、救いを求めて仏教に帰依し、を朝廷内に入れてろうとしました。そのとき、韓愈は「を論ずるの表」を奉って憲宗を諫めましたが、憲宗の逆鱗に触れ、死罪を言い渡されました。しかし、周りのとりなしで罪一等を減ぜられ、即日、流刑地であるへの出立を命じられました。この時作ったのが**「左遷せられてに至りに示す」**です。韓愈は、流刑地で一生を終えるつもりでしたが、翌年、憲宗の死により朝廷に呼び戻されることになりました。この詩を紹介いたします。

**一封朝奏九重天　　　 にす の天**

**夕貶潮州路八千　　　ににせらる 八千**

**欲爲聖明除弊事　　　の爲に を除かんと欲す**

**肯將衰朽惜殘年　　　てをて を惜まんや**

**雲横秦嶺家何在　　　雲は に横たわりて 家 くにか在る**

**雪擁藍關馬不前　　　雪はをして 馬 まず**

**知汝遠來應有意　　　知る のするは に 有るべし**

**好收吾骨瘴江邊**　　**好し 吾が骨を收めよ のに**

がにく途中で作った詩を二首紹介いたします．始めに**「の西にのにう」**を紹介致します。この詩から、韓愈は二度と長安に帰ることができないと思っていたことが窺えます。

**嗟爾戎人莫慘然　　　 とすることかれ**

**湖南地近保生全　　　 地近くを保つことし**

**我今罪重無歸望　　　我 今 罪重く 帰る望み無し**

**直去長安路八千**　　**直ちに長安を去る 八千**

続きまして**「に題す」**を紹介致します。気候の暑い地方に来て病気にかかったときに、潮州の気候が更に厳しいことを知り、不安が募ったことが分かります。

**不覺離家已五千　　　覺えず家を離れて 已に五千**

**仍將衰病入瀧船　　　仍お衰病をてに入る**

**潮陽未到吾潮州　　　未だれ能く到らざるに**

**海氣昏昏水拍天　　　 として水 天をつ**

**（ナレーション）**

李白は、安史の乱のときに、永王の参謀となったため反乱者として死罪を言い渡されましたが、周囲のとりなしにより流罪に減じられ、長江を遡って蜀の南になるに向かいました。その途中、にいる妻に宛てた**「南のかたに流されてに寄す」**という詩を作りました。この後、李白は、白帝城まで来たとき、大赦に依り無罪とされ、「早に白帝城を発す」を作って帰還することになりますが、李白の助命嘆願のためにとなった妻に会うことはできませんでした。この詩を紹介いたします。

**夜郎天外怨離居　　　の を怨み**

**明月樓中音信疏　　　明月の 音信なり**

**北雁春歸看欲盡　　　 春に帰って 尽きんと欲す**

**南來不得豫章書　　　に得ず の書**

　李白が、流刑の地野郎に向かって長江を遡る途中に、の近くに寄り、**「と黄鶴楼上吹笛を聴く」**という詩を作りました。長安に帰りたいという気持は、寂しい「」を奏でる笛の音を聴いて、増していったようです。

**一為遷客去長沙　　　一たびとって に去る**

**西望長安不見家　　　西のかた 長安を望めども家を見ず**

**黃鶴樓中吹玉笛　　　 を吹く**

**江城五月落梅花　　　 五月**

杜甫は、安史の乱の時、粛宗が即位した事を聞きつけ、その役に立とうとして、家族を租界させ、粛宗の下に駆けつけようとしましたが、途中で、安禄山軍により長安に幽閉されてしまいました。このとき、破壊された長安の眺めをと自分の身の上を詠ったのが、有名な「」です。自然が変わらないことが、人間の営みの儚さを際立たせていることを詠った、見事名作品です。**「春望」**を紹介致します。この詩は､日本では群を抜いて好まれている詩ですが､中国では余り人気がなく、杜甫記念館の主要展示物は、日本では殆ど知られていない『三吏三別』です。

**國破山河在　　　国破れて山河在り**

**城春草木深　　　城春にして草木深し**

**感時花濺涙　　　時に感じては花にも涙をぎ**

**恨別鳥驚心　　　別れを恨んでは鳥にも心を驚かす**

**烽火連三月　　　 になり**

**家書抵萬金　　　 にたる**

**白頭掻更短　　　 けば更に短く**

**渾欲不勝簪**　**べてにえざらんと欲す**

特に刑罰を加えられたわけではありませんが、杜甫と同じように長安に幽閉された詩人にがいます。廬綸は杜甫と同じように、長安の春の眺めを**「長安春望」**という詩に詠いました。廬綸は、長安に幽閉されて、その風景を見るにつれても、望郷の念に堪えられないことを詠っています。

**東風吹雨過青山　　　 雨を吹いて青山を過ぐ**

**卻望千門草色閒　　　ってを望めばなり**

**家在夢中何日到　　　家はに存って 何れの日にか到らん**

**春生江上幾人還　　　春はに来って幾人か還る**

**川原繚繞浮雲外　　　 たり の**

**宮闕參差落照間　　　 たり の**

**誰念爲儒逢世難　　　かわん　と為って に逢い**

**獨將衰鬢客秦關　　　独りを将って にたらんとは**

安史の乱の時、は、安禄山軍に捕らえられ、強制的に安禄山軍の役人とされ、に務めさせられました。しかし、春の景色を見ても心楽しまないものがあり、**「春行 興を寄す」**という詩を作りました．自然は、変わらないが、鳥の声が空しく聞こえると詠っています。この詩を」紹介致します。

**宜陽城下草萋萋　　　 草**

**澗水東流復向西　　　 東に流れて 西に向う**

**芳樹無人花自落　　　 人 無く 花 自ら落ち**

**春山一路鳥空啼　　　 　鳥 空しく く**

　軟禁された翌年の春、杜甫は長安からの脱出に成功し、から、側近としての「」の役職をさずかりました。しかし、粛宗がの宰相であったを処罰しようときに、ここぞとばかりに弁護したことで、粛宗に疎まれ遠ざけられてしましました。謹厳実直な杜甫は、この時デカダンスに落ち入り、酒浸りの生活を送りました。この時作られたのが**「曲江二首」**です。「古希」の語源となった**「其の二」**を、紹介致します。荒れた生活の中で美しい自然だけは、自分と心を共にしてくれと言う感情が見事に歌いあげられています。

**朝囘日日典春衣　　　よりりて日々に をし**

**毎日江頭盡醉歸　　　毎日に を尽くして帰る**

**酒債尋常行處有　　　は 行く処に有り**

**人生七十古來稀　　　人生七十　古来稀なり**

**穿花蛺蝶深深見　　　花をつは として見え**

**點水蜻蜓款款飛　　　水にするは として飛ぶ**

**傳語風光共流轉　　　にす 共に)して**

**暫時相賞莫相違　　　 し うことれと**

王安石との政争に敗れ、幾度も流罪となった詩人にがいます。蘇軾の流罪は、特に閑職を与えるというようなものではなく、流刑地で飢え死にさせることを目的とした物が多かったのですが、蘇軾は農民から土地を借りて自分で耕作するなどをし、流刑の身を力強く生き抜きました。

　始めてに流されて着任した直後に作られた名作**「初めてに到る」**を紹介いたします。グルメで楽天家であった蘇軾の性格が表れています。また、「仕事もしていないのに圧酒嚢(ボーナス)を受けている。」と、ちょっとした皮肉も。

**自笑平生為口忙　　　ら笑う 口の為に忙しかりしを**

**老來事業轉荒唐　　　 事業 た**

**長江繞郭知魚美　　　長江 をりて の美なるを知り**

**好竹連山覺筍香　　　山に連なりて のしきを覚ゆ**

**逐客不妨員外置　　　 のを妨げず**

**詩人例作水曹郎　　　詩人 例としてのとる**

**只慚無補絲毫事　　　只だ らくは の事をうこと無く**

**尚費官傢壓酒囊　　　おの****を費やすことを**

蘇軾は、自ら耕した地を「」と名付け、自分の号も「東坡」としました。白居易が自分の農地を「東坡」としたことにちなんだものです。その地を詠った「東坡」という詩を作っております。荒れた地でも、蘇軾にとって愛着のあるものでした。**「東坡」**を紹介いたします。

**雨洗東坡月色清　　　雨はを洗って月色清し**

**市人行盡野人行　　　行き尽くして行く**

**莫嫌犖確坡頭路　　　うかれ の**

**自愛鏗然曳杖聲　　　ら愛すとして杖をく声**

は、このように流罪の身を楽しむような楽天的な性格であったため、政敵からにくまれ、遂にまで追放されました。蘇軾は、海南島で一生を終わるつもりでしたが、思いがけなく大陸に戻ることを許されました。その途中、の宿場町まで来たとき、中国本土が水平線上に見えました。その喜びを表した「の」は絶唱とされ、頼山陽に多大の影響を与えています。**「澄邁驛の通潮閣」**を紹介いたします。

**餘生欲老海南村　　　 老いんと欲す の村**

**帝遣巫陽招我魂　　　帝 をして 我が魂を招かしむ**

**杳杳天低鶻沒處　　　として天れ　 沒するの処**

**青山一髮是中原　　　　れ**

唐の詩人は、一時、付近のにに流罪とされました。罪はそれ程重くなく、李白に会い酒宴をしたりしております。この時代に**「の」**という詩を作りました。洞庭湖付近の風光明媚な風景を詠ったものですが、やはり、許されて長安に帰りたい気持は強かったようです。この詩を紹介致します。

**日長風煖柳青青　　　日 長く 風 暖かにして 柳 たり**

**北雁歸飛入窅冥　　　 帰り飛んで にる**

**岳陽城上聞吹笛　　　 を聞く**

**能使春心滿洞庭　　　く をて 洞庭に満みたしむ**

日本においても、政争や主君ににくまれた結果、流罪となったり、投獄させられた人物は、幕末に多く現れました。代表的な人物は、に憎まれた西郷隆盛です。西郷隆盛は、に流されたとき、初めて、から詩作を学び、その心境を詩にあらわしております。によって追放され投身自殺したを思いやることにより、寂しさが一層増すことを示したものです。この詩**「偶成」**を紹介致します。

**雨帯斜風叩破紗　　　はを を**

**子規啼血訴冤譁　　　はにき をう**

**今宵吟誦離騒賦　　　 す の**

**南竄愁懐百倍加　　　の 百倍加わる**

幕末の志士であるは、を作りましたが、藩主によって投獄され、厳しい取り調べを受けました。その中で、妻に自画像を送り、自分の考えが正しいことを「の」という詩にして書き添えました。その後切腹を命じられ、「ああ、けしからぬ世の中にて候」と憤慨しながら最期を遂げ、この詩が遺作となりました。**「獄中の作」**を紹介いたします。

**花依清香愛　　　花はにって愛せられ**

**人以仁義榮　　　人は仁義をって栄ゆ**

**幽囚何可恥　　　 ぞ恥ずけんや**

**只有赤心明　　　只 の明らかなる有り**

逆境の中で最大のものは、死に向かう境遇でした。はの謀略により謀反の罪を着せられ、療養先の白浜温泉から都に移送される途中、の地で、万一の生存を願って和歌を作りましたが、その願いも空しく絞首刑にされました。これらの和歌を紹介いたします。

**の浜松がを引き結び くあらばまた還り見む**

の運命に同情する人は多く、この松は「結び松」と呼ばれ、この和歌にちなんで、その運命を憐れむ漢詩や和歌も作られています。有間皇子の霊を慰めようと磐代後を訪れたは、**「の結び松」**という詩を作りました。この詩を紹介いたします。

**別離雖惜事皆空　　　別離惜しむとえども 事 皆空し**

**綰柳結松情自同　　　柳をね松を結ぶも はずから同じ**

**馬上賦詩猶弔古　　　馬上 詩をし おを弔う**

**寂寥一樹立秋風　　　 に立つ**

　　又、長忌寸吉麻呂は、同じように「結び松」を見て和歌を詠みました。この和歌を紹介致します。

**磐代の野中に立てる結び松 こころも解けずいにしへおもほ**ゆ

**大津の皇子はの実子でしたが、人望が厚かったため、天武天皇の死後、の実子であるの政敵とされて、謀反の罪を着せられ自害しました。**

**そのときに作られた漢詩と和歌をと紹介いたします。**

**金烏臨西舎　　　 にみ**

**鼓声催短命　　　 をす**

**泉路無賓主　　　 無く**

**此夕離家向　　　この夕 家をりて向う**

　**ももづたふの池に鳴くを今日のみ見てやりなむ**

**今までに、逆境にある人々の詩歌を紹介してきましたが、逆境にある友人のことを思いやった詩歌もあります。ととは、生涯を通しての親友でしたが、元稹が罪を得て江稜に流されていたとき、に宿直していた白居易は、元稹のことを思いやり、「八月十五日夜 にりし 月に対してを憶う」という詩を作りました。この詩の「 新月の色　 の心」は絶唱とされ、和漢朗詠集に採られています。この詩を紹介し、『物語で楽しむ漢詩と和歌』「逆境を詠う」を終わります。**

**銀臺金闕夕沈沈**

**獨宿相思在翰林　　　 うて に在り**

**三五夜中新月色　　　 新月の色**

**二千里外故人心　　　 の心**

**渚宮東面煙波冷　　　の東面には 冷かに**

**浴殿西頭鐘漏深　　　の西頭には深し**

**猶恐清光不同見　　　 恐る 　同じくは見ざらんことを**

**江陵卑濕足秋陰　　　はにして る**

（令和元年９月２０日作成）

参考文献等

　『中国漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『日本漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『和漢名詩選評釈』簡野道明著、明治書院出版